



6月のがんサロンは、14日（金）に開催されました。テーマは「がん薬物療法について」でした。講師は、薬剤師の景山康二郎さんです。

がん薬物療法とは？

細胞障害性抗がん剤・分子標的薬・ホルモン薬・免疫チェックポイント阻害薬といった薬剤を用いてがん細胞の増殖・浸潤・転移を抑制する治療の総称のことを言います。

1. 5つの治療法について

① 術前化学療法



手術の前に腫瘍を小さくして手術しやすい状態にすることを目的に行います。手術前に薬の効果を最大限引き出せるよう規定量のお薬を使用したい治療です。一方で、手術が控えていますので副作用でしんどくなりすぎていないか？ということにも注意が必要な治療でもあります。

② 術後化学療法

手術でがんを取り除いても体内に残っているかもしれない微小ながんを薬でたたくことで再発のリスクを低減させる治療です。一般的に術後は抗がん剤による副作用が出現しやすいといわれていますので、規定量よりも少なくした量で行うこともあります。

③ 放射化学療法

放射線療法と薬物療法を同時に行い、がんを小さくすると同時に転移や再発を予防する治療法です。抗がん剤と放射線治療を同時に行うことで、放射線による効果を増強させる狙いもあります。



④ 進行・再発がんに対する化学療法

手術などによる治療が行えない場合は、がんの進行を遅らせることを目的とした治療を行います。いわゆる延命治療です。効果を定期的にCTなどの画像で評価しながら行います。腫瘍の大きさや数が変わっていなければ効果ありと判断し継続します。多くの場合、期間による治療の終わりはありません。

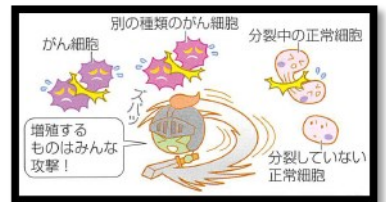
⑤ 血液がんに対する化学療法

血液のがんでは、手術による治療が行えないため、薬物療法が中心となります。他の治療としては、放射線療法や造血幹細胞移植などの治療法もあります。薬物療法の目的は、病気の症状が軽減またはほぼ消失し、臨床的にコントロールされた状態（＝寛解）になることです。

2. がん薬物療法の主役である抗がん剤について

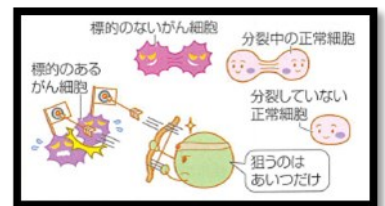
① 細胞障害性抗がん剤

いわゆる抗がん剤のことで、細胞分裂が活発な組織に対して作用を発揮してしまうため、がん細胞もがんではない細胞も区別することなく薬の影響が出てしまいます。そのため、白血球の低下や吐き気、下痢、脱毛といった副作用が現れることがあります。



② 分子標的薬

がん細胞に発現している特定の目印をめがけて作用する薬です。標的のないがん細胞や標的のない正常細胞には作用しません。使用前にはちゃんとその標的が発現しているかあらかじめ確認してから使う場合もあります。分子標的薬の副作用は標的となる分子に特異的なものが多く、皮膚障害や血圧の上昇などがあげられます。



③ ホルモン薬

主に乳がんや前立腺がんなどで用いられる薬剤です。乳がんでは女性ホルモンを減らしたり、働きを抑えたりする目的で使用します。前立腺がんでは、男性ホルモンを減らしたり、働きを抑えたりする目的で使用します。更年期様症状やほてりなど、ホルモンバランスの変化に伴う副作用が発現することがあります。

④ 免疫チェックポイント阻害薬

免疫が本来の働きを取り戻すようにお薬が免疫を賦活化させる薬です。副作用は賦活化された免疫の暴走による正常な細胞への攻撃です。これを免疫介在性有害事象（irAE）と呼んでいます。免疫が関連する組織で起こる可能性があるため、対象範囲は全身となります。当院では免疫チェックポイント阻害薬を使用している患者さんには副作用確認シートを点滴のたびに配布しております。



3. 代表的な副作用

① 骨髄抑制

血球には、白血球・血小板・赤血球があり、これらは主に骨髄中の造血幹細胞が分裂・分化することで産生されています。造血幹細胞は正常な血球数を保つために活発な細胞分裂を繰り返していることから、抗がん剤の影響を受けやすく、骨髄の造血機能が障害されることを骨髄抑制といいます。白血球の中でもとくに重要な好中球が減少すると感染しやすくなる（＝易感染）ことが問題となります。治療を受けた10日～14日ごろが一番減少する時期となりますので、その時期の発熱には特に注意が必要です。

② 悪心嘔吐



吐き気が出る時期やタイミングにより急性、遅発性、突発性、予期性の悪心嘔吐に分けられます。分類により使用する吐き気止めが異なる場合があります。吐き気止めの使い分けや組み合わせは制吐薬適正使用ガイドラインといった指針をもとに使用してします。

③ 下痢

整腸剤や下痢止めを使用して下痢の症状を抑えます。下痢をしている最中は水分の喪失による脱水に注意が必要です。症状がある間はアルコールやカフェイン・香辛料などの刺激物の摂取は控えましょう。

④ 手足症候群

手のひらや足の底に、赤み・痛み・水ぶくれ・亀裂などの皮膚症状が現れる副作用です。手足を清潔に保ち、保湿をしっかりと行うことで重症化を予防できるといわれています。保湿剤の使用は最低でも1日2回は行いましょう。また窮屈な靴や熱いお風呂やシャワーなどの使用は避けましょう。

⑤ 脱毛

抗がん剤を使用して、2～3週間ごろから髪の毛や体毛が抜け始めることが多いです。髪の毛を引っ張ると簡単に抜けてしまうため自分で抜いてしまう方もいらっしゃいますが、無理やり抜くのは避けてください。外見に大きな変化をもたらす副作用であり、心理的・社会的なダメージを受けてしまう副作用の一つです。補助金制度などもあり、ウィッグの購入など事前の準備ができることもありますので、ぜひ医療者までご相談ください。

最後に・・・

薬物療法はがんの種類によって様々な薬を使用します。薬が違えば副作用も異なります。皆さんが使用しているお薬について、相談や質問などがありましたらご相談ください。薬剤師は地下1階の薬局・外来の化学療法センター・各病棟に配置されております。



どの薬剤師でも相談していただいて結構ですのでどうぞお気軽にお声かけください



【事前申し込み・お問い合わせ先】

呉医療センター・中国がんセンター
がん相談支援センター

☎：0823-24-6358（直通電話）

平日：9時～16時

よろず・がん相談窓口（④番窓口）

平日：8時30分～17時15分

編集：がん相談支援センター